

英語科授業案

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-08-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長田, 敬司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00026752

英語科授業案

授業者 長田 敬司

Bjorn Christenson

- 1 日 時 平成30年10月12日(金) 第2時 11:20~12:10
- 2 学 級 3年B組 (3年B組教室)
- 3 題材名 “The Diary of Anne Frank”
—Can We Live in Peace?—

4 題材の目標

平和や幸せについて漠然とした考えをもつ子どもたちが、アンネ・フランクの心情や人生観に思いを馳せながら、平和について英語で意見交換することを通して、平和や幸せのあり方についての考えを深めていくことができる。

5 題材観

(1) アンネ・フランク

アンネ・フランクは『アンネの日記』の著者として知られるユダヤ系ドイツ人の少女です。今でこそアンネ・フランクは複雑な時代を生きた少女として世界中で知られていますが、アンネの思いや考えに世界中の人々が共感を覚え、感動する理由は何でしょうか。それは、アンネ自身が私たちと同じように、悩み、苦しみ、憤り、悲惨な境遇にありながらも、決して絶望しない不屈の精神で、私たちに勇気づけてくれるからだと考えられます。アンネが日記をつけ始めた13歳といえば、子どもから大人へと変化する時であり、アンネは映画スターに憧れ、異性への興味をもち、周りの大人と衝突しながら、自分の存在意義や世の中の不条理について考えをめぐらせています。時代も国も異なる、壮絶な時代を生きた一人の少女に、自分と重なる部分を見いだした私たちは、アンネ・フランクの生涯や、残された文章からあふれ出るアンネの思いを感じずにはいられなくなるのです。



(2) アンネが生きた時代背景

① ドイツ軍の台頭とユダヤ人

第一次世界大戦で敗れたドイツは、領土や植民地を没収されたうえに、多額の賠償金を支払うことを余儀なくされたことにより、国としての力を失っていました。そのような中、次第に勢力を拡大していったのがアドルフ・ヒトラー率いるナチス(国家社会主義ドイツ労働者党)でした。疲弊して強力な指導者を求めている国民の支持を受けて、ヒトラーは1933年に首相に就任すると、ドイ

ツの経済的な困窮や社会不安の原因は、経済力をもつユダヤ人にあるとして、反ユダヤ人政策を次々と執行していきました。

ユダヤ人をめぐる苦難の歴史の中でも最も残酷なものとして、第二次世界大戦時の迫害が挙げられます。ヒトラー率いるナチスはユダヤ人の虐殺に盲進し、実にヨーロッパにいたユダヤ人の3分の2にあたる600万人以上が犠牲になりました。宗教上の理由や政治的な理由に加え、当時の国民の感情論も加わり、それらが複雑に絡み合うことで実行されたユダヤ人の迫害は、人間が恐ろしい決断をしうる生き物であることを証明した事実であると言えます。恐怖におびえ、命からがら祖国を離れたり、堪え忍んだりすることしかできなかったユダヤ人が抱いていた理不尽な思いは、私たちの想像をはるかに超えるものだったでしょう。

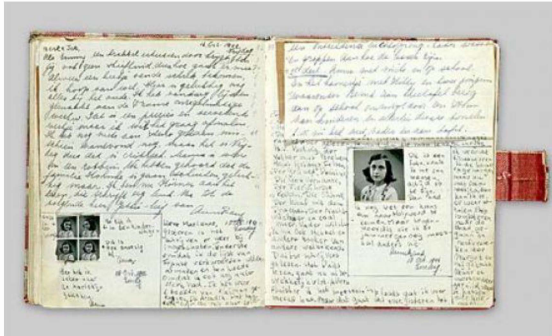
② アンネ・フランク一家

ドイツに住んでいたユダヤ系ドイツ人の両親(オットー・フランク、エーディット・フランク)は、ナチスの迫害を免れるためにオランダのアムステルダムに移住しました。しかし、ドイツ軍の侵攻がオランダにまで及び、ドイツ軍によって次々とユダヤ人が連行されている事実を知ると、オットー・フランクは、元々彼の職場であった建物の3階と4階を隠れ家として利用しながら生活することを決意します。オットーを尊敬していた人達の援助を受けて、2年以上に渡る隠れ家での生活が始まりました。昼間は、足音をたてることや、トイレの水を流すことも制限されました。締め切った部屋、プライバシーも保護されない生活からくる発狂したくなるほどの不安は、隠れ家に生活する住人の全員が抱えていたに違いありません

ん。アンネにとって日記をつけることは、その不安から身を守る手段の一つだったのかもしれませんが。

(3) アンネの日記

13歳の誕生日、アンネは父オットーから日記帳をプレゼントされます。



I hope I shall be able to confide in you completely, as I have never been able to do in anyone before, and I hope that you will be a great support and comfort to me.

(ANNE FRANK より引用)

アンネはこの日記帳を「キティ」という架空の名で呼び、何でも打ち明けることができる無二の親友として大切に使います。閉ざされた部屋の中で生活するアンネにとって、日記をつけている時間はかけがえのないものだったでしょう。そこには、親に干渉されることに対するいらだちや、異性への思いなど、子どもから大人に変わる多感な時期に見られる繊細な心情が、赤裸々に記されています。アンネが悩み、苦しみ、それでいて些細なことにも喜びを見いだしている強さが日記から垣間見えます。また、アンネの記す内容や文章からは、時を追うごとに成熟していくアンネの様子がうかがえます。

日記を、父からももらった書類カバンに毎日大切にしまっていたことや同居している人への非難やいらだちについて書かれていることなどから、アンネは日記を誰にも読ませなかったと考えられます。アンネがひたすらに日記と向き合った日々がつくりあげたある種の閉鎖性により、今でも『アンネの日記』が世の中の人を引き付けているのかもしれませんが。

また、時代や人間そのもの、平和や幸せなどに対する深い洞察も読み取ることができ、アンネの

聡明さに驚かされます。

As you can easily imagine we often ask ourselves here despairingly: "What, oh, what is the use of the war? Why can't people live peacefully together? Why all this destruction?"

The question is very understandable, but no one has found a satisfactory answer to it so far. Yes, why do they make still more gigantic planes, still heavier bombs and, at the same time, prefabricated houses for reconstruction? Why should millions be spent daily on the war and yet there's not a penny available for medical services, artists, or for poor people?

(ANNE FRANK より引用)

(4) 本題材で味わう英語科ならではの文化

本題材において、子どもたちが味わう「英語科ならではの文化」を「アンネの生涯について書かれた英文について、聞き手を意識しながら要点をおさえて伝えること」「アンネの日記を読んで、平和について考えたことや感じたこと、その理由などを伝え合う中で、伝わった達成感を味わうこと」と捉えます。

(5) 平和と向き合う子どもたち

人々の多様な価値観のもと、様々な生き方が混在する現代で、平和な世界の実現は本当に可能なのでしょうか。アンネのように、言葉を後世に残すことができた命はほんの一握りでしょう。しかし、誰もが幸せに生きることを望んでいます。それは国内外、今も昔も変わりません。それにもかかわらず、あるいはそれゆえに、人々は衝突を繰り返してきました。

『アンネの日記』を読むことで、平和を願う少女の思いが私たちの心に突き刺さります。「平和とは何か」「人とはどのような生き物なのか」という命題を突きつけてきます。中学校を卒業し、これからの社会を創っていく子どもたちが、ふと立ち止まり、壮大なテーマについて考え、議論を交わすことは価値のあることでしょう。家族、学校、国、『アンネの日記』には様々な社会が書かれています。時代を超えたアンネからのメッセージを受け取った子どもたちが、自分の理想を掲げ、他者と協力しながらよりよい社会を主体的に創造していく一人になっていくことを願っています。

参考文献：アントニオ・G・イトゥルベ著 小原京子訳(2016)『アウシュビッツの図書係』 集英社
エヴァ・スローニム著 那波かおり訳(2015)『13歳のホロコースト』 亜紀書房
小川洋子(1995)『アンネ・フランクの記憶』 角川文庫

木島和子訳・編(1981)『写真集 アンネ・フランク』 小学館

早乙女勝元編(1984)『母と子でみるアンネ・フランク 隠れ家を守った人たち』

草の根出版会

深町眞理子訳(2003)『アンネの日記 増補新訂版』 文藝春秋

B. M. Mooyaart Doubleday 訳(1993)『ANNE FRANK : The Diary of a Young Girl』

BANTAM BOOKS

6 新学習指導要領との関連

(2) 読むこと

ウ 社会的な話題について、簡単な語句や文で書かれた短い文章の要点を捉えることができるようにする。

(3) 話すこと [やり取り]

ウ 社会的な問題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて述べ合うことができるようにする。

7 題材構想 (全6時間)

- | |
|---|
| (1) アンネ・フランクに思いを馳せる (2時間 本時はその2) |
| (2) 『アンネの日記』を翻訳しよう (3時間) |
| (3) 平和について議論しよう “Can people live in peace?” (1時間) |

(1) アンネ・フランクに思いを馳せる

(2時間 本時はその2)

授業者は“Is the world at peace?”と子どもたちに尋ねます。社会科の歴史分野で世界大戦のことを学んだ子どもたちは、戦争の途中にない私たちを平和と表現するかもしれません。世界に目を転じて、まだまだ紛争が絶えず幼い命が無情に奪われることが止まない現状をとらえ、平和とは言えないと答えるかもしれません。ここで授業者は一枚の写真を提示します。子どもたちは英語でその写真について自由に描写していきます。子どもたちは絵からわかることをもとに“*She is the man's daughter. She got a present from him.*” “*That picture was taken a long time ago.*”のように二人の描写をしたり、時代背景について説明したりするでしょう。中には“*The man is sick and he is giving his final present to her.*”のように物語を考える子どももいるかもしれません。写真に対する関心が高まったところで、“*Do you know who she is?*”と写真に写っている少女について知っていることがないかを子どもたちに尋ねます。

本題材でこの少女の人生について仲間と読んでいくことを伝えた後、4人グループをつくるよう促します。授業者はAnne Frankの人生について、四つの局面に分けて書かれた英語を教室の四隅に

貼ります。子どもたちは分担して、それぞれがアンネについて書かれた英語を解釈してグループに持ち帰り、互いに伝え合います。

アンネの人生について大まかに理解した子どもたちに、授業者は“*Do you think that Anne was happy or not?*”と尋ねます。しかし子どもたちはその質問に対する答えを出すには情報量が少なすぎると感じるでしょう。そこで、答えを出すために必要な情報はどのようなものか子どもたちに尋ねます。子どもたちが知りたいであろう情報は以下のようにになると考えられます。

- What is written in Anne's diary?
- How did Anne spend her life in the secret annex?
- How did Jewish people live in that period?
- What was Anne's family like?

など

子どもたちが必要としている情報を確認して次時につなげます。

授業者は前時で把握した、子どもたちが必要としている情報をもとに英語を用意しておきます。子どもたちは、再度グループで協力しながら四つの英語の要点を読み取り、印象に残ったところやキーワードを中心にアンネの心情に迫っていきましょう。子どもたちはアンネの人生と、本時で得た情報をもとに、「アンネは幸せだったか」という問いについて話し合います。屋根裏に隠れていた時期のアンネについては、家族と一緒に生活して

いたことに注目して幸せだったと考える子どもや、激変した生活に戸惑いとても幸せとは言えなかっただろうと考える子どももいるでしょう。子どもたちは “Do you think that Anne was happy or not?” に対して以下のように話し合おうでしょう。

- She was not happy because they were in a war and she couldn't get out of that place.
- She was not happy because she often quarreled with her mother. I understand her feelings.
- She was happy because she was with her family.
- She was happy because she liked a boy named Peter. Love is blind.
- I don't know. She tried to find happiness, but it must be difficult.
- I want to read Anne's diary to understand her real feelings.

など

アンネが幸せであったかということについて話していた子どもたちは、いつの間にか自分にとっての幸せとは何かということについて考えていることに気づくでしょう。そして、アンネが日記にどのようなことを記していたのかを知りたくなっているでしょう。

(2) アンネの日記を翻訳しよう (3時間)

アンネとアンネの生きた時代背景をつかんだ子どもたちは、アンネの心の深層に迫ります。『アンネの日記』の中でも、屋根裏での生活が具体的に書かれている場面、同居人への感情が表出している場面、恋に悩む場面、戦争に寄せて書かれている場面、希望を捨てずに明るさを失わないアンネの性格が読み取れる場面は、子どもたちが夢中になって読んでいく場面だと考えられます。『アンネの日記』の中には、難解な表現や抽象的な語句も多く出てきますが、同年代の少女が、誰かに読んでもらうためではなく、自分の中にあふれ出てくる思いを記すために書かれた日記であることを知っている子どもたちは、辞書をひいたり、ALTの助言を受けたりしながらも主体的に読み取っていくとしましょう。その『アンネの日記』を一語一語かみしめながら読もうとする子どもたちは、翻訳に挑んでいくでしょう。初めのうちは、隠れ家での状況を理解したり、直訳したりすることにとどまっている子どもたちも、翻訳を見せ合ったり、どのような表現がアンネの心情を表すものとしてふさわしいかについて話し合ったりすること

で、アンネになりきって訳していくことや、言葉を吟味しながら訳していくことにおもしろさを感じ始めるでしょう。

Why should millions be spent daily on the war and yet there's not a penny available for medical services, artists, or for poor people?

[なぜ多くのお金が日によって戦争に使われるべきなのでしょう。しかし、医療や芸術や貧しい人のためには1ペニーもない]

- millions や a penny は具体的な金額を表しているわけではない
- 文全体を把握した上で、単語を見直すとアンネの心情に近い訳になりそう



[莫大なお金が毎日毎日戦争に費やされているのに、どうして医療や芸術や貧しい人々のためにお金が使われないのでしょうか]

授業後には世界に一つだけの『アンネの日記 日本語訳版』ができあがります。そして子どもたちは以下のような感想を残すでしょう。

- I read Anne's diary and received an important message from her. She sometimes wrote about her family and she often didn't get along well with her mother. But I understand it. It's not only about her. I feel it's difficult to live well with my parents, too.
- I can't decide if she was happy or not, but I'm sure that she wanted to live in peace. She was smart and she had a strong will. I think she was a person who was respected by many people
- Everyone wants to live in peace. We must never make such a terrible history again.

など

(3) 平和について議論しよう “Can people live in peace?” (1時間)

“Is the world at peace?” と子どもたちに再度問いかけます。子どもが出す答えは題材の最初に出した答えと変わっているかもしれませんが、変わっていないかもしれません。しかし、深くなっていると思います。さらにこの時間では、“Can people live in peace?” と子どもたちに問い、題材を通して考えたことを伝え合います。「平和」という定義も「幸せ」という定義もそれぞれにある中

で、互いの考えを交流させて自分の考えを深化させていきます。授業者は板書をしたり、話し合いが深まりそうな質問をなげかけたりして、互いの思いや考えを交流する場を支援します。ALTも議論に参加することで、異なる視点が加わることになり、議論が活性化するでしょう。「平和」「幸せ」という抽象度の高い課題ではありますが、子どもたちは伝わった達成感を味わいながら乗り越えていくでしょう。以下は議論で話される内容と、授業後の感想です。

- I think we cannot live in peace. People cannot stop having wars.
 - I don't think so. Now we can use the Internet and communicate with people all over the world. We can make many friends and exchange our ideas.
 - We all have different cultures. We need to understand that and try to understand others.
 - Anne's father gave Anne a great present, and Anne gave us a great present.
 - I don't know if we can live in peace or not. But we must make a peaceful world. We must learn from history and the girl named Anne Frank.
- など

- We talked about peace today, but I still don't understand what it's like.
- I thought it was natural for me to live with my family, but now I know it is because we have peace.
- Communicating with others is necessary.

- I thought I was not happy because I often quarreled with my mother, but now I understand I am happy because I can quarrel with my mother.
 - I visited Hiroshima some years ago, but I didn't think so deeply at that time, but my feelings will be different if I visit Hiroshima again.
 - I'm sure that the world will be changing, but we should know that all people want to be happy.
 - Peaceful society is one thing, but happiness is always in our mind.
 - 漠然と現代社会のことを平和だと思っていたが、実は多くの犠牲のうえで成り立っているということを確認できた
 - 私と同年代の女の子が、苦しみの中でも自分らしさを失わなかった事実に素直に感動した
 - 普段「平和」とか「幸せ」について深く考えることはないが、友だちとじっくり話し合うことができてよい機会となった
 - 価値観の違う人たちと上手にやっていくことは難しいが、私は自分の価値観と意見をもって自分らしく生きていきたい。そう、アンネのように
- など

価値観がそれぞれに違う人と人とは根本の部分ではわかりあえないかもしれません。しかし、私たちが築いていきたいと願う平和や幸せは、そのような世界の中で創っていくしかないことも事実でしょう。それでも、共に生きる世界中の人々の思いや考えに思いを馳せ、共に幸せを追い求めていく子どもたちの姿こそ、天国で家族と再会したアンネが願っていたものに他なりません。

